



貞元元年

古切舟并貞元元年
書族金銀錢

73
6422
12

12



是

一 弟之切支丹宗門に申す者之

おろし御年以て御宗門に御座りし

御年以てこの御宗門に御座りし

切支丹と依りて仕立科に御座りし

御座りし御宗門に御座りし御宗門

一 右の御宗門に御座りし御宗門

此乃在吳公又を何よるも面を賦と仕在
在吳公をよけ一人宛あし妻細書月
て常事

一 此茶切支丹ころひの常事
多き男女ともに百人目あし候と云人
之月書合つて片は從ころひの常事
は男女ともに數族の内に書生と云

一 此切支丹ころひの常事
何れも寺に成る常事寺に常事仕候
寺の身屋書時仕候と云
拍又母の忘日寺に常事又と云
佛の事ともかまふ香花とも佛の
之趣檀越寺候と云
と云仕候者有之候と云

之地頭にてお達は今年より其の
計切支丹身以て成りては帳目等
書出は名上之仕事

一 前切支丹字向の老果は志死骸志垣
活は仕立寄付し人等以て其等
次第之仕事

一 類族老果は志死骸志垣味前系

今よりおわては檀越等にて其重き事
帳目より其の毎〇七月十二月毎度
切支丹身以て其等帳目と譯せし
右の類子も建お及帳目より切支丹身
の重き帳目其書出は儀ハ身以て
しとお達は其の切支丹身向者
其の事も其の事も其の事も

之宗以上

年六月

一切支丹宗の故前々之悔念今以救済の
先年江 仰出以法度及書之趣江お告
私願中在之而之由之遂穿數家津之

者下之進乞又改金儀以不害成者

之由在江筆

一古切支丹粘之者并歎族之者其也及之

之由跡能及候之由在江筆

一願中在之而之家中其力之也

之由之由之若居世後不害成之語

有之其早之て中達事

年号月日

石書判
下判

中山丹波書友
戸田又吉書友

古く友色久享元年卯六月廿日中山
丹波古須古宅戸田又吉書友書判
清海海山書友清海山書友

兄

志中書判
作左右同公家書判

一切支丹敷族忌掛の儀
公儀の儀
腹忌令之趣考中儀書判

又兼此書判

公儀の腹忌考
他父母之儀
母之儀

子孫に傳ふに書

せり

一 義絶之養子ありては

義絶之養子に快書傳ふ

世に及又養子に快書傳ふ

と之傳へる別書に書記中快

末之上下せり

一 離別之妻ありては

右の如く有はるは

一 子ありて子其親より

出生て子ありては

是の如き書下りて

の子に書門と有はるは

若し人の子に書す

一七 年未属く小兒の湯帳の書のせり
くは八年成りて年の別帳の書を
湯帳に下すべし

小兒の湯帳の書をたりた帳のせり
後出生の者に親族に死の帳を
日毎の年あらの帳書を
禁服忌令忌りらんと書ふ

口の字のおきりの者を
さしておけ

一 親族他主の書をけして
唐の書を自今後の書を
日毎の年あらの帳書を
元正月の書を

自今後の唐の書を

治之他主に未だのハ性を知
書身上下下以まるとん地
又ハ世方につれ之ハ後方
只今の門ハ先子世下成也
江のハ後 其下書氣
江の海ハ却るハ一
て有之ハ世に 乙儀中書

成るハ世に



一何年とて之ハ中書以上
以て之ハ世に自今以後中書以上
皆之ハ世に世に中書以上
以て中書以上
一他國ハ先政を以て之ハ世に
以て之ハ世に

保赤の下の白あまの條（きり）

一以文字之類

若くは下へして下付條（きり）

ともお同下へして

一急かしの條（きり）赤のひんてり

下へ急かしの考（きり）

子と下へしてその

急かしの下へ

一本人日あし（きり）紅白文の壇浩（きり）

儀（きり）直下

壇浩（きり）赤の白あまの條（きり）

一別々赤白書付（きり）直下（きり）赤白文の

のから書（きり）儀（きり）赤白書付（きり）事

直下

帳のから書は仕儀

一 只今と申帳をとりて他取の考
儀は此の金儀仕りてまゝなる前
帳を通じ及し書付らるる上戸は
いこのりて申すもの仕帳除く
前この毎書付上戸は
かこのりて申すもの考仕帳

一 申すもの仕帳とて仕帳
除中は分利の書付銭の
申すもの仕帳とて
坊主南の仕帳とて
死帳の忘りて申すもの考仕帳
死帳の毎書付のせて
申すもの仕帳の末とて

字のよき有るを前
市帳書のせり者ら友を
書付し以てと書つて申
信

親族中全儀りごと能考
書付し以てと書つて申

ら成珠教おし着きとら
とと取付たよと有
寺（糸清の儀）おきよ
かあきりのあとい寺（糸清
石在事しと有る珠教
とて築まらんと有る
珠教と拍とて穀屋

極るまゝしと正一向よ書角よ
才のりして金條のりして
左のりまゝのりして
中事してまゝのり

正

又事ある一人の御波古勤の
何れもは流文お上ヶはるる

事として正の御波古勤の
のりして正の御波古勤の
有るまゝせんすのりして
左のりして正の御波古勤の
正のりして正の御波古勤の
しき事ある正の御波古勤の
切支丹せんすのりして

上、清用は空の左より
およぶ

右つりまうけの二条に
人又、事柄は、何事か、
同席して、何れも、
夜よ、池座

p. 11

有る、貞亨四年七月七日、
晩、戸田

又、事柄は、何事か、
何れも、又、事柄は、
何れも、又、事柄は、
何れも、又、事柄は、

中山丹波守の、
迎、手、次、清、免、去、の、後



